

軍記物語の女性たち (11)

大姫の生涯 —『吾妻鏡』より—

岡崎 嘉彦

大姫は治承2（1178）年に源頼朝と妻政子の長女として生まれる。大姫というのは「長女」を意味する通称で、本名は不詳。源頼家、実朝の姉である。

6歳の時、当時勢力を拡大しつつある木曾義仲の嫡男義高と婚約する。政略での婚姻であったが大姫と義高のただただ幼い二人は仲良く幸せな日々を送り、お互いの存在は欠かせないものとなる。しかし、義仲と父頼朝の争いが起こり、戦に負けた義仲は討ち取られてしまう。将来への禍根を恐れた頼朝は義高の殺害を決意する。義高は逃亡を試みたが、頼朝の兵に誅されたことにより大姫の心は深い悲しみに覆われ、以来食事もあり喉を通らなくなったという。それから十余年の長きに渡り、大姫の心は不安定な状態が続く。頼朝は義高の追善供養を行い大姫の回復に努めるが、大姫の心が晴れることはなかった。その後、大姫の身体が一時落ち着くと、頼朝は京の名門貴族一条高能との縁談を進める。これを知った大姫は「婚姻をするくらいなら深淵に身を投げます」と強く拒絶し、頼朝はこの縁談を断念する。しかし、その後頼朝は大姫を後鳥羽上皇の妃とするべく入内工作を計っていく。頼朝は宮廷の実力者に金品を送り積極的にこの話を進めていくが、その最中、建久8（1197）年大姫は僅か20歳という若さでこの世を去る。政略の渦に巻き込まれる中で、どこまでも純粋に一人の男性だけを想い続けた儂い女性であった。

大姫という女性は頼朝の子として悲運な運命を背負わされた女性である。本来尊敬すべきはずの父頼朝に恋人義高を殺されてしまい、幼い彼女にとって耐え難い心の傷を背負って生きる事を余儀なくされる。頼朝とすれば時が経てば

次第に義高への想いを忘れていくと期待していたが、大姫はひたすら義高の事を想い続け、二人で過ごした日々の事を忘れることはなかった。頼朝は平治の乱で捕らわれた際、平清盛に幼かった兄弟共々命を助けられていたにも拘わらず、今、平氏を追討していることで自分と義高の身を重ね合わせ、幼い彼の将来に対し強い疑惑の念を持っていたのである。

しかし、義高を失った大姫は父頼朝に強い恨みを抱き続ける。再三薦められる縁談にも彼女は拒み続け、頼朝とも距離を置く。それは、大姫にとっての意地であり愛する人を奪った父に対する報復でもあった。愛する相手を慈悲なく殺されてしまうという余りにも大姫の心を蔑ろにした行為は、幼い彼女の心を深い闇に突き落とすには十分な材料であった。頼朝も心に深い闇を背負った大姫を見て後悔し始めるが、父と子の仲が改善されることは最後まで無かった。大姫という女性が望んだ物は、官位や財産、地位といった物ではなく、唯、幼い頃に誰よりも慕いあった義高との日々に戻りたかっただけなのである。

大姫は、その願いが叶うことはなくこの世を去った。悲しみと憎しみを心に抱き、それは次第に彼女の心と身体を蝕んでいった。悲しい末路をたどった女性であるが、最後は、誰の色にも染まらずに愛する義高の元へと旅立った。きっと、別世でも二人の物語は続いていくのだろう。

■主な参考文献、そして、今回おすすめする本

○『源平女性の光と影』（図説人物日本の女性史；3）
小学館 1979年。 請求記号 281.08-Zuse-3

おかざき よしひこ（司書・情報サービス課）